書評・Book Review

魚類学雑誌
49(2): 147-148

川と湖沼の侵略者　ブラックバス. —日本魚類学会自然保護委員会（編）. 2002. 恒星社厚生閣, 東京. 150 pp. ISBN4-7699-0967-5. 2,500円（税別）.

本書は，バス（オオクチバスやコクチバスを総称して，ここではバスと一括する）自体の移入元，食性を中心とする生態，他生物への影響，分布拡大に対する行政と日釣振の対応，および我々が考慮すべき課題についての各専門家による報文8章からなっている．全体的な論調として，わが国の生態系にバスがいかなる負の変容をもたらしながら拡大しているかの実態を明らかにし，それを食い止めるための方策をわが国の事情を踏まえて考察していくことを目的とした編集となっている．

バスがわが国の淡水生態系に対して，大きな負の影響を及ぼしていることを否定するものはいないだろう．まず，私個人の観点からの感想を述べてみたい．ここで論じられていることは，すでに原著論文や報告書，著作という形で公表されている部分も多く，その点では新知見に基づいているというものではない．したがって，前段1章～5章までの論文内容は，私自身の中でバスの基礎といったものとして整理することに役立ったが，おおよそ知見としての情報をすでに得ていたものであり，1章の瀬能論文における分類の話を除いて目新しさは感じなかった．とはいえ，これはまったくの私事であり，そういう情報を得ていない一般の方々がおそらく圧倒的に多いに違いないので，その価値が減じるというものでない．本書の意味は，ここにこそあるといってよい．つまり，これは，バスが及ぼす淡水生態系への具体的影響と科学的に予測される変化を，研究者によって初めて取りまとめた刊行物といえよう．

2章の淀論文，3章の高橋論文，4章の苅部論文，5章の東論文は，バスの食性を中心にした生態学的な成果である．これまで，侵入者としてのバスの存在を明確に位置付けた生態学的研究は，これらだけといってもいいのではあるまいか．ある魚種の生活に影響を与える要因やその程度を把握することは容易ではない．淀論文の，バスは場所によって成長に伴う食性シフトが異なる特性をもつという報告は重要である．このバスの「動物ならなんでも食べるという幅の広い食性」は，おそらく小規模の密放流でありながら短期間に分布域を広めていったことと関係するだろう．また，この「爆発的増加」は繁殖生態に関わる特性も関係すると思われる．しかしながら，ここで説明されている生殖腺の特性との関連は，根拠が弱く何がどのように分布拡大に効いているのかがよくわからなかった．もっとも淀も指摘していることだが，食性と同様に多様性を示すであろう繁殖生態についてはほとんど把握されていないというのが現状であり，今後この研究課題は重視されるべきである．高橋論文のタイトルにある「魚類群集」は，実際は「魚類相」とでもいうべき内容となっている．苅部論文は昆虫学者として，飛行中や休止中のトンボ成虫をバスがジャンプして食すことを報告している．トンボへの食害は，バス問題が単に水の中の問題だけではないことを明確に示している．こうした知見を一般の目に触れる形で，科学的にまとめた書物は，これまでなかったのではなかろうか．なお，きわめて個人的な感想であるが，東のような魚類生態学の先達が継続的に研究論文を発表していることは，我々後進にとって刺激的ですらある．その外来種に関する長年月のデータの蓄積に基づく論稿は，種間関係をCPUE（1網当たりの採集尾数）や胃内容物組成などから，競争解放 (competitive release) の視点を加えて興味深く解析するものとなっている．いずれにしても，我々はこうした研究成果を積極的に社会に還元していく必要があり，バス問題の科学的な位置付けや了解事項を少しでも社会的な場に対して情報提供していかなければならない．

以上の前半部で示されたように，日本に移入したバスの分類学的位置や，バスの生態系への影響を定量的に把握した結果は，今後のバス問題の前提事項として位置付けられる．これを踏まえたうえで，私が気になった章や文言は，6章の大浜論文の後半部，7章の丸山論文と8章の中井論文のいくつかである．つまり，執筆者の意見が展開されている箇所である．ここでそれぞれについてくわしいコメントは加えないが，具体的実践を伴うシナリオが展開されていない点を指摘しておきたい．現状認識を単に整理したり，理想やこうあるべきだと個人の思いを言い放つのはたやすいが，現実的で具体的な作業を，系統立ったシナリオを作成することは困難である．

大浜論文では後半部に，バス問題の今後の方向性をこれまでの経緯を上手くまとめながら，もっともリアルな形で描写しているように思えた．「オオクチバスを免許した県（山梨県）の一関係者として」大浜は，入れた者勝ちの状況から脱するために，今必要なのは「密放流防止体制の早急な確立と徹底的な議論である」という．このことに私も賛意するし，法的整備と同時に幅広い分野や立場の合意形成を通じる過程を経て，水産的な観点からは新たな漁場管理システムの構築こそが必須であろう．

丸山論文は，バスの分布拡大とそれへの行政および日釣振の対応の歴史を事実認識としてよく整理し，かつ「スミワケ」案を中心として個々の問題に対する持論を適切にまとめている．ただ，多くの釣り人が立ち上がってバス釣りを支える一部の情勢を「糺し，ついでに国民不在の水産行政をも糺すべきである」という言説には，首を傾げてしまった．問題解決を他に転嫁するように思えたからである．

8章の中井論文は，国内外のバス問題および外来種問題の様々な論点を，保全生態学的な視点から簡潔に概説し，明解な展望を示した好著である．中井もいうように「密放流」という人為的行為こそがバス問題の病根である．これにはアウトドア趣味への商品経済と釣り嗜好への欲求満足が絡み，解決へのシナリオを見い出すことを複雑にしている．このことはバス問題に対して，単に生物学的な取り組みだけでは不十分であることを意味する．

解決の当面の早急なる到達点は，予防と駆除である．そのために我々が了解事項としておくべき認識は，中井も引用している「科学的・経済的な確実性のない状況を，外来種の管理（根

絶・予防）を先延ばしにする理由にしてはならない」という原則である．このことは研究者にこそ，心しておくべき認識であろう．というのは，研究者が今さらのように，「バス釣りが盛んになるまで何ら対処せずに放っておいて，即時全面禁止というのは，現実的な対応ではない」という大浜論文の言説にも一理あるからである．この研究者としての反省をバス問題に生産的に活かすことは，バスの科学的研究の促進以外になく，それを予防や駆除に応用することである．

願わくば，9章として全体を総括し，淡水生態系の悪化に関連する他の要因とバス問題を位置付ける論稿があって欲しかったし，あるべきであったと思う．それはおそらく，移入初期段階でありながら分布拡大しつつあるコクチバスや，バス以上に定着の兆しをみせるブルーギルの問題との共通性と差異性を明らかに位置付けるものであり，よりバス問題の方向性を鮮明にするのではないかと予想する．

最後に，本書の目的としては本質的ではないが，刊行物としての問題点を指摘しておきたい．誤字や文章推敲の甘さが目立ち，かつ段落間や文章間の文脈のつながりの悪さが気になる箇所もある．また，本書が一般向けに書かれたとするならば，説明すべき用語などもあるように思えた．もっと鮮明にした方がよい写真や，加工してわかりやすくすべき図表もある．これは編集者の問題であろう．こうしたことは再版時に手直ししていけばよいことであり，論稿としての大きな問題ではないが，本として公表する以上，その出来不出来に対する責任をもつ必要があり，自戒の意を込めて，あえて述べておきたい．また，この点について慎重に対応しておかないと，思い過ごしでなく「バス擁護派」に不要な揚げ足を取られ兼ねない．それを気にしないといえば，それでもよいのであるが，彼らに妙なところをつかれて気勢を挙げられるネタにされるのは面白くない．

しかしながら一方で，この性急ともいえる刊行は，バス問題が淡水生態環境に深刻な事態をもたらしているにもかかわらず，「問題の理解と解決の手だてを考えるための適切な科学書が見あたらないこと」（編集にあたって，後藤）によって，急いで出版をしたということのようだ．これは残念な事ながら，現状では仕方のないことだろう．その点において，本書は大いに意義をもつべきものである．言うまでもなく，これを研究者間の了解事項や確認として留まるような代物にしてはならない．つまり，本書の意味は，社会に向けていかにこれを活用し，利用される機会を増やすかにかかっているのである．

（森　誠一　Seiichi Mori；〒503-8550 大垣市北方町5-50 岐阜経済大学生物学教室　e-mail: smori@gifu-keizai.ac.jp）

図書紹介・New Publications

魚類学雑誌
49(2): 148-149

□魚類学

衆鱗図　第一帖・第二帖． 江戸時代の魚類図譜「衆鱗図」が香川県歴史博物館友の会博物図譜刊行会から刊行されていますので，紹介いたします．

「衆鱗図」は高松松平家に伝来する四種十三帖の博物図譜の一つで，海水や淡水に生息する様々な生物の図を，折本状につないだ台紙の表裏に貼った画帖で，全四帖から成っています．第一，二及び四帖は表裏とも海水魚（イルカ類含む），第三帖表は水性無脊椎動物，第三帖裏は淡水魚が描かれています．

制作年代は宝暦十二年(1762)に高松藩五代松平頼恭が，魚類図譜（現存せず）を幕府へ献上したこと等から，図譜献上と同じ宝暦年間頃と推察されています．絵師については楠本雪渓（宋紫石）とともに讃岐の絵師三木文柳などの可能性が考えられ，当時高松藩に仕えていた平賀源内が関わって制作されたと推察されています．

松平家に秘蔵されて来たため，ほとんど知られてなく，松井魁著「書誌学的水産史並びに魚学史　鳥海書房，東京，1984」においても触れられていません．ただ，科学朝日編「殿様生物学の系譜　朝日新聞社1991」では「衆鱗図」について高い評価で記述しています．また，西村三郎編著「日本海岸動物図鑑 [I]　保育社1992」（「衆鱗画譜」と記載されている）の中に「衆鱗図」中のアサヒガニ等の引用が見られます．江戸時代には大名間でこのような図譜の貸し借りがあったようで，江戸時代の魚譜としては栗本丹州が描いたものが有名ですが，その中に「衆鱗図」のものが多数転写されていると推察されています．

精緻な写実で彩色が施され，鱗の一枚一枚が描かれ，多くは種名がすぐに思い浮かびますが，学術的に鰭条数や鱗の枚数がどの程度正確であるかは検証されていません．描かれている魚類等は明らかに高松藩内産に留まってなく，産地の表示もなく，分類学的に統一された順には描かれていません．また繰り返し描かれている種もあります．こうしたことから，現在の科学水準からすると学術的というより，美術品的といった色合いが濃く感じられます．しかし，約240年前の魚類等の博物学として見ればたいへん興味深いものです．印刷は京都の歴史的な美術品等を手がける会社が行っており，見事な刊行物です．

実物大の刊行ではなく，A4版横とじの様式で，現在「一帖」「二帖」が刊行されており，「四帖」まで刊行が予定されています．書店等を通しての販売はしてなく，香川県歴史博物館友の会から直接入手する事が可能です．刊行物の概要と入手方法は次のとおりです．

高松松平家所蔵　衆鱗図　第一帖
　発行日　平成13年3月31日
　編　集　香川県歴史博物館
　発　行　香川県歴史博物館友の会博物図譜刊行会